



Title	幕末の女流歌人・中西為子
Author(s)	管, 宗次
Citation	詞林. 1989, 6, p. 37-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67277
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

幕末の女流歌人・中西為子

管 白木次

一、はじめに

岡山県津山の徳守神社の神官であり、藤井高尚の門人として美作歌壇の指導者であった小原千坐は、幕末の浪華歌壇においても屈指の存在であった。その小原千坐が神戸熊内の豪農・中西重之を訪れて、「葺合の今小町」と噂の高い中西重之の娘・為子に面識を得ると、次の和歌短冊を中西家に残していった。

為子をはめて

うぶすなは何の神ども歌よめる

よき子うませり何の神ども 千坐

この短冊は、現在も東中西家当主、中西一郎氏蔵として大切に残されている。中西為子は、美人としての評判だけでなく、当時、阪神間に大きな力を持っていた黒沢翁満門人の女流歌人として、知られた存在であった。

また、森統三翁は労著『松本奎堂』（『森統三著作集』第六巻、中央公論社、昭和四十六年二月刊）に

（一）

当主謙三の妻為子は、鉄兜が戯れに今紫式部といったほどの才女であった。然も客の前では一言半句も物をいわぬ。奎堂等の去ろうとするのに、短冊数葉を書して贈った。奎堂も国歌には造詣するところがあつた。村田春海が唐宋八家の文法を以て長歌を中興したというのに擬して、己も長歌も作つたのであるが、この為子の歌と書とは、さすがの奎堂も大いに感服したことだった。

とされている。妻為子とは中西為子、鉄兜は河野鉄兜、奎堂は松本奎堂である。中西為子は、幼年期には叔母にあたる桑樹庵に和歌の手解きを受け、後に黒沢翁満に本格的な和歌・歌学・文法学を学んでいた。和歌と筆蹟は天分的な才に恵まれていたようで、森統三翁があげられる逸話からは、衆人いかなる人からも愛される奥ゆかしい人柄であつたことが察せられる。

二、中西為子について

中西爲子は、神戸熊内村（現・神戸市葦合区熊内町）の名家中西家の長女として天保十一年に生まれた。

中西家は、もともと武田二十四将の一人、加賀見二郎遠光の直系で、武田氏滅亡後、摂津国に移り、さらに大阪の役に豊臣方につき、破れて福原に逃れ、清水氏を名乗ったが、後に菟原郡葦合庄中尾村に移り住み、三度の転居を経て中尾村の西方約十町の熊内村に土着することになった。この頃より、中西氏を称するようになった。

中西家には、『源家中西氏系図』も伝えられている。生没年が記されておらず不明であるが、中西氏を称した中西経祐から五代目の正用（寛永十二年十一月一日生まれ、元禄二年三月十四日没、享年五十五歳）の長男の克が東の中西家を、二男の正春が西の中西家を設けることとなり、現在に至っている。本家分家の関係ではなく、代々重縁の間柄で、男子が絶えると、東西中西家から養子を取るなどして家系をつなぎ、家運の隆盛をはかっている。

中西家が、いかに格式と威勢を誇ったかであるが、中西爲子の祖父にあたる中西芳之が布引奥の山林境界の争いに、近郊の山田村や矢部郡の大庄屋や庄屋などと共に呼び出された時、他の庄屋たちは一段低い平間に平伏させられたのに、中西芳之だけは代官と同列に座して、訴えも一方的に中西家側の熊内村の勝利となったという（『中西家餘聞』『葦合文化の源泉 布引瀧と周辺史蹟』太田敬三著、昭和二十七年四月一日刊）。

爲子は、東の中西家の当主であった中西重之の長女として生まれ、はじめ祖父の芳之に手習いの手解きを受け、次に叔母の桑樹尼（元明尼とも称した）に和歌を学んだ。叔母の桑樹尼もかなり和歌を学んでいた人で、中西家の人々は、みな文雅に心を寄せ、また長じていた。為に数多くの文人墨客が中西家を訪れ、暮末には、先述したが松本奎堂、河野鉄兜、宗像廣尾、松林飯山、藤本鉄石なども中西家の客となり、彼ら志士に経済的支援をもしていた。数多くの中西家の客の一人であった黒沢翁満に爲子が和歌の弟子として愛されたのは、爲子十歳歳の頃からで、黒沢翁満編の社中類題歌集『類題採風集』（初編・嘉永六年三月刊・橋本桂三郎広臣蔵板 製本所江戸日本橋通貳町目山城屋佐兵衛）の巻末付載「採風集作者姓名録」の二丁オモテに

高子 摂津免原 中西芳之孫 十二歳

郡熊内村

として載せられ、同歌集には、短歌三首が収められている。

これが四年後の上梓、『類題採風集』（二編・安政四年十一月刊・橋本渡広臣蔵板 製本所 江戸日本橋通貳町目山城屋佐兵衛）になると、巻末付載「採風集二編作者姓名録」の二丁ウラに、

蒼子改 摂州免原 中西蒼左衛門女

爲子 郡熊内村

とされ、短歌のみならず、次のような見事な長歌までも詠じて、

所載されている。

春のはじめの歌

為子

あづさ弓春さりくればあしたには霞棚引夕には驚きなき柴の戸の梅もほゝゑみ春柳のまゆもひらけて玉はこの道の人もゑらしにゑみさかえつゝ浦安の国ぶりしるき物にもあるかも

ありとあるものことぐに春とへば

いとぐ勾ひのますこゝちする (下・長歌一丁表)

また、同書、文章の部所載の為子の文章では、十六歳の女流歌人としての初々しい感受性が、生まれ育った免原郡の冬の夜を息をつめたように写しているが、それはそのままに多感でデリケートな少女の息づく内面を写し、眠れぬ冬の夜の少女の姿を浮かびあがらせるようでもある。

冬山家

為子

人めも草もかれはてたる宿は峯の嵐のみなん時にものおもはするにましてよるなどとはいとしめやかにてそごろさむきに軒の妻戸にたゝずみよりてきつねのしはぐかちなきたるたとへん才なく哀れなるにふくろうのいとふつゝかなる声してうめきあひたるも中々もの心細くなんいちしばのいつはあれども淋しさぞ

とりあつめたる冬の山里 (下・文章六表六裏)

当時、大坂にあった黒沢翁満の門人中にも、女流歌人として、古谷十子・竹中糸子・葛馬妙子と中西為子をあわせて「舊居の

四才女」と呼ばれたのも、この頃からであった。

為子は、幼名を高子(たか子とも)とし、現在中西一郎氏御架蔵のなかにも「たか子」署名の短冊がある。後に、蒼子と改め、先にあげた「採風集」編作者姓名録から考えると、もう十七歳頃には為子としていたことが判明する。また、「ため」を通称としていたらしい。雅号は美津俱利乃屋としていた。

為子の父である重之は、芳之の長子で、文化九年五月二十五日生まれ、安政六年九月五日没、享年四十八歳、与左衛門を称したが、父の芳之の影響もあって、熱心な勤皇の士で常時、中西家には食客として六、七人の志士があったという。為子の祖父にあたる芳之は熊内八幡神社の神官でもあり、地元の教化・教育活動の場として童蒙教訓舎を開き啓蒙にあたっていたが、これを継いだ重之も書道天狗といわれる程に能筆家で、中西家の屋敷内に香字庵(二間に五間ばかりの平屋建てで、六畳三室程の建物)を設けて、数多くの文人墨客を招いた。そのなかには勤皇の志士が多く、彼らに重之は経済的支援を惜しまなかったために、中西家は逼迫したという。また中西家は、名門のため、容易に幕吏を邸内に入ることを許さなかったので志士の格好の隠れ家にもなったという。しかし、ついには、幕吏の探知するところとなり、重之は自害して表面上は急死とされた。また為子の叔母の桑樹尼も勝気な女性で、幕府密偵が潜入したのを知り、懐剣で刺し殺したとも毒殺したともいわれている。

父の重之が没した時に、為子は十九歳にあたる。為子は、東

の中西家にあたるが、夫は西の中西家から迎えている。為子の夫は、西の中西家の中西福之の長子で、謙二郎、後に与左衛門を称する。重之に愛育され経書、和歌にも通じたが、道之の父福之も和歌を好み、現在、中西良允氏蔵品に中西福之の和歌短冊がある。道之は天保九年八月十四日生まれであるから、為子より二歳年上となる、明治二十七年八月二十四日没、享年五十七歳である。

為子は、夫の道之との間に一子も無く、明治三年九月十四日没した。享年三十歳にあたる。為子の墓碑には「明治三年九月十四日」と刻むが、これは太陽暦の明治三年九月十四日の字数を省くために「九十四日」と刻んだ、という、太陰暦では明治三年八月二十三日にあたる。

慶応四年五月二十七日、兵庫県初代県知事となった伊藤博文は、颯爽と馬に乗って為子の香字庵へ和歌を学びに行ったというが、これは為子の美しさにひかれてのこととも噂されたともいう。また、灘の名家である嘉納家の人々もみな為子について和歌を学んでいる。

為子の才色兼備が、いかばかりのものであったかを窺わせるものに次の如きものがある。筑前の儒者である宗像蘆屋が安政二年十一月月上旬に中西家香字庵の客となった折に、すぐに河野鉄兜に書面を送り（謙二郎は兄でなく、為子の夫であり、蘆屋の誤解であった）、

兄は謙次郎と云ひ十八歳読書に精を出し候、尤も右、大石

村水石方へ毎日参候、主人与左衛門は書道天狗、娘（為子）は十五歳容顔美麗、国学に身を委ね和歌も丈夫にでき、一絃琴杯弾じ、物語りもの著述訳山有之、先づ、撰中の尤物にて奇なる者に後座候、末々は如月廊才子（月廊は鉄兜の号）に非ずんば可配もの之無様吼へまわり候、何と一見旁御来遊は如何、乍云酒美なり集も老兄の不嗜所、別に見物致す処も無之唯布引の飛泉と右女史のみなり

とまでしている。鉄兜は既に妻帯していたので、この件は蘆屋の思い通りにはならなかったが、これを機に鉄兜と中西家とは交流がはじまり、現存する「香字庵」の扁額は河野鉄兜の雄渾な運筆によるものである。宗像蘆屋の病没後の萬延元年九月十七日、はじめて中西家を訪れた鉄兜は旅日記の『雲鶴日程』のなかに、

謙次郎、字子徳、学於藤沢東畝、秋田秋雪、父与左衛門重之、以去年八月亡、女為子善和歌、雖未相面、時通書信、以故待余如旧識、延入後亭、置酒設飯、亭倚高臨曠、有林池之勝、

としている。為子の夫は病弱がちであったというが、藤沢東畝に学んでいることも判明する。諸説に河野鉄兜の妾であったとするものがあるが、これは明らかな誤りである。むしろ、為子は貞淑な女性としての振舞があったことは、本稿の冒頭に引用したように、一言半句も客の前では物を言わぬ才女であった。また香字庵を訪れた松本奎堂は一絃琴（須磨琴とも）をよく弾

じ愛したことが知られているから、天誅組の中心メンバーであった奎堂も為子の一絃琴の音を楽しむことがあったかもしれない。

三、黒沢翁満と為子

中西為子の和歌国学の師は、黒沢翁満である。まず、黒沢翁満について述べたい。黒沢翁満は寛政七年、伊勢桑名に生まれた。姓は平、名は重礼、通称を八左衛門、葎居と号した、安政六年四月二十九日没、享年六十五歳である。安政六年は為子十九歳にあたり、老師と若き乙女とは四十六歳の隔たりがあることになる。

翁満は父を行業と称し、加茂季鷹と交流のあった学者肌の人であった。翁満は桑名藩主松平忠亮に仕えたが、文政六年藩主の武威忍城へ転封となって、共に忍藩に移ってから重用されている。武士としては能吏でもあり、用人格となつて、大坂蔵屋番を任せられ、毎年半期毎に交替していたが、大坂留守居役を命ぜられ、没するまで堂島の忍藩邸に住んだ。大坂には十余年あつて萩原広道・加納諸平・西田直養・佐々木春夫・足代広訓などと交流があつた。また葎居の門人に江戸・忍藩・桑名・伊勢の人々が数多いのは、こうした翁満の経歴によるものである。

摂津・播磨にも葎居の門人が多くあつたのは、忍藩が播州に加古郡二見・多可郡西脇・加西郡富田・九会村など約七千石もの領地が飛地としてあつたためである。大坂留守居役は、その

飛地の巡見も役目の一つであつた。

『播磨の家づと』は、その巡見の折の和文旅日記で、『国書総目録』に所在不載の写本であるが、川島禾舟「近世播磨歌壇の一瞥」(『歴史と神戸』神戸史学会編集、第十七巻第二号昭和五十三年三月一日刊)に紹介がある。それによると、巡見に旅行く黒沢翁満の後を追ひ、高砂の十輪寺の住職で兵庫の植田春海(武庫春海と称し万葉学者として注目される)の門人であつた十輪寺臥雲法師と荒井杜別当台淵と古谷土子(先述の葎居の四才女の一人)が、高砂、二見と連夜訪問し、和歌の贈答をなして、それより翁満は舞子、須磨、兵庫を過ぎ、布引の瀧に至り、前年に代官の竹垣が歌碑を建てるからと頼んで来たので応じて詠んだ和歌の

露をたてしづくをぬきにくりためし

五百はた百の布引の瀧

の碑がまだ建てられていないので失望して帰つた、という。惜しむらくは、翁満の旅の年月日を明らかにしていないこと(落合重信氏は『神戸和歌史』に天保とする)と、やはり全容が不明なことであるが、布引の瀧は中西家のすぐ近くであるから、あるいは、この頃には既に、もう中西家を訪れていたかもしれない。

大坂の社中門人らによって上木された黒沢翁満歌集『葎居後集』(安政四年序刊)には、次の詞書をもつ翁満の和歌がみえている(巻一、二十六丁裏)。

中西為子がせうそこに

柿のみを添ておこせけるかへし

うれしくもをりをすぐきで山かきの

あかき心はあらはれにけり

現在、中西一郎氏蔵の律居翁満の為子宛書簡にも、九月ともなると「れいの山かき」を「さわに給へるこそうれしけれ」と、熊内村の中西家に美味の柿の木があったのであろうか、度々、大坂の翁満のもとへ柿を手紙に添えて送っている（黒沢翁満の為子宛書簡一括は、他日拙稿において翻刻発表するものとした）。度々送られる柿に丹念な礼を述べているが翁満と中西家の柿のことは、頼山陽と撰津伊丹の岡田家の柿のことも連想させて興味深い。撰津伊丹は銘酒の郷、また中西家も為子が白鶴の名で今も知られる灘の酒造業嘉納家の人々に和歌の手解きをしていたので、酒が文人墨客を呼び、柿も美果が好まれたのかもしれない。

黒沢翁満は、女流歌人の指導に懇切であったのか、木村三太郎『浪華の歌人』（昭和十八年四月三十日刊）によると、『鴨川五郎集』には「浜尾武蔵忍藩黒沢翁満娘」として、黒沢翁満には娘があって、和歌をよくし、同歌集には、

橋上納涼

橋の上を涼みがてらによるゆけば

水こそ見えね風ぞながる、

など四首が所載であるという。

また、翁満は、月並の歌詠みではなく、二十歳以前には戯作者を志したことがあり、山東京伝に戯作の添削を依頼している。これは、京伝から懇ろな意見があつて、翁満も中断しているが、『律居集』には、京伝著『骨董集』上木に際して送った和歌の

いつまでも元手のつきぬ小間物の

店びらきせよ板のかずかず

や、曲亭馬琴とも交流のあったことが判明する和歌がみえてい

る。

著述の数多い翁満であるが、『童話長篇』（安政四年改刊）舌切雀・桃太郎・勝々山・猿蟹合戦・花咲爺・乙姫・小便川の七編の童話を萬葉調の長歌並短歌に仕立てたもので、これなど『国書総目録』に「類・狂文」となり、藤井乙男著『校註雅文笑話集』（昭和三年七月二十日刊）に収めているが、むしろ戯作的な趣さえ感じられるもので、なかなか翁満の力量が発揮されたものである。因に、萬葉集にも、翁満は研究の力を注いだものらしく、『国書総目録』によると、『萬葉集全』の著作が見出されるが、所在不明（未見）である。中西為子にも物語の著作があつた、というが、今に伝わっていない、宗像麿屋は披見する機も得られたのであろう、その添削は、翁満によるものであつたかもしれない。

翁満の著述として、最も知られているのは、『猿姑射秘言』であつて、全享好成（鴨鶯散人、眩能様主人）輯録「増補いろは別好色本目録」（別名「増補好色本目録」）にも、

藐姑射秘言 大本前後 二冊 好色三奇書の内

黒沢翁満の作後篇は安政六年秋刻成よし末尾に記せり

と、漏らさずに書名と解題があげられている。(全章好成は鮫
龍棲主人とも名乗り、『増補いろは別好色本目録』の写本の諸
本に共通して「小林蔵書」の蔵印が巻頭にみえることから、同
書の著作者は、小林源太郎その人ではないだろうか。)『藐姑
射秘言』は、好色本では好色三奇書の一つと名高いが、これは
力量があつて著名な国学者歌人であり、しかも大坂留守居役と
いう地位にある侍が書いたということ、文体内容共に低迷劣
俗な作品の多い好色本のなかでは群を抜いた作品であつたこと
による。

しかし、翁満は、当時の堂上にあつて最も進歩的の歌風といわ
れ、和歌の実力にあつても地下の歌人たちに決して劣ることの
なかつた千種有功卿とは深く交わり、有功卿の深い敬愛を得て
いた篤学の歌人でもあつた。興味深いのは、千種有功卿書簡に、
翁満は源氏百首などを著しいとやさしき武夫と存居候処初

対面より議論をしかけられ驚き入候

とあつて、『源氏百人一首』(天保十年刊)を有功卿が一覧す
ることがあつたのであろうか、温和な人柄かと思ひ込んでい
ると、初対面から激しく個性を闘わせてきたわけである。『源氏
百人一首』については、『律居黒沢翁満大人著述書籍目録』
(『難波職人歌合』(嘉永七年刊)巻末付載二丁)に次のよう
な解題がついている。

源氏百人一首

源氏物語中の人物ある限を出して一人に歌一首つゝをあげ
おのづから一部の趣のしらるゝやうに標註を加へられたり
されば源氏をよむには先これを見て階梯とすべき書なり

幕末期の大坂歌壇は複雑な学派系統が交わり、その中心は鈴
屋の諸派か平田学の流れを受けたものが多かったが、それに馴
染まぬ学派もあり、大坂という地の持つ抱擁力の土壤が、それ
らを反発、拮抗させながらも、他に富士谷成章の北辺門や香川
景樹の桂園派や、在来の末流の存在をも許容して明治まで続か
せている。

そのなかでも、大坂の蔵屋敷の武士たちの存在は実に大きな
ものがあつた。西田直養も歌人として知られるが、小倉藩の大
坂藩邸留守居役である。また彼らは大坂幕末期歌壇の有力な歌
人であつたが、非常に個性的な表現が和歌に表われはじめるこ
の頃にあつて、個性的な歌人といえるものを持ちはじめていると
いえよう。

翁満で、当時高い評価を得たのは『難波職人歌合』であつた
らしく、『浪花権芳譜』では所載の歌人詩人は名所旧跡・名木
・神事行事・風俗を詠みこんで、画人と見開きにしたものが多
いなかで、渡辺良躬の筆による、漁師が潜水し魚を仕掛網で捕
える絵に対して、

黒澤翁満号津舎称八右衛門所著有言疊抄雅言用文章難波
職人歌合諸書今在堂淵忍侯邸内

世わたりのみちはさま／＼おほかたや 翁満

魚のすみかも我ものにして

と、職人歌合の趣向にしている。『言霊抄』（文政八年刊）、『雅言用文章』（嘉永五年序刊）は既に上梓されて、『難波職人歌合』（嘉永七年刊）は大本二巻二冊の実に見事な出版であったが、なかに載せる職業が大坂という地の活発さと雑多さをよく捉え、しかも広い分野に及びながらも、趣のある仕立てとなっている。

『雅言用文章』は、大坂坐摩社で上梓されたもので、いわゆる坐摩社版といわれるものであるが、注目されるのは、他にも翁満の著述『言霊のしるべ』（天保四年刊）も坐摩社から上木されていることである。これは、勤皇の志士であり、幕末の勤皇歌人として高く評価されている佐久良東雄が翁満に非常に私淑していたからで、『類題探風集』（初編）にも、東雄の和歌がみえている。その頃、渡辺資政の尽力で坐摩社の祝部として東雄は大坂にあって、坐摩社版の出版にあたっていたのである。『言霊のしるべ』の序文は佐久良東雄が認めている。

佐久良東雄は西田直養・佐々木春夫・萩原広道らと共に紅葉狩に出かけたり、黒澤翁満・萩原広道・佐久良東雄・佐々木春夫・古谷土子・西田直養らで歌合を度々催している（市村其三郎著『勤皇家佐久良東雄』昭和十七年十月二十日刊）、佐々木春夫は伴林光平のバトロンとして知られ、西田直養は長州藩が攘夷を決行するのに対して小倉藩が佐幕論に傾くことを嘆き、

ついに死を覚悟して絶食、元治三年（慶応元年）に没している。こうしたメンバーを歌友としての歌会に参合している翁満であればこそ、勤皇を自負する中西家の人々も、為子の和歌国学の師として黒澤翁満を選んだのであろう。現在残る為子の和歌短冊のなかに次の二首がある。

いにしとしの冬こくくにびとの舟

あまたまるこして

数ならぬをみなにしあれどえみしらに

うしろのやまのおくみせめやも（裏名・為子）

えみしどもの花見にまかりたるを見て

ひがめにはいかにから見らむわが国の

光りとなれるやまさくら花 為子

前にあげた一首は、裏名からも、また歌の詞書からも攘夷決行がしきりと志士の間にいわれた頃であらう。後にあげた一首は神戸開港後のことであらう。

黒澤翁満が没したのは安政六年であるから、女流歌人として九歳の時であること前述したが、単なる教養修得の和歌の師匠ではなく、国学を通しての思想的啓蒙と追求の師でもあった翁満の死は、為子にはあまりに早すぎたといえよう。しかし、時間的長短は、影響的深淺とも、学力的高下とも無関係なことであったらう。黒澤翁満、法名は誠忠院円応翁満居士、大坂夕陽丘の珊瑚寺に葬られる。墓碑名は、門人の中川元端による、次

にあげる。

黒澤翁満墓 誠忠院円応翁満居士、舊居大人黒澤氏、武州忍澤之内臣也、為人溫厚好學、汎愛人、人亦信之、君命祗役于浪華、凡十有余年矣、身不下堂而其事立并、善用入故也、尤嗜國雅、抑本邦中古以降人廢其學、學失其伝、其言多倣漢士之文、得意而失辞、近世契真二傑出、開古學其業、我大人亦夙潛心此、乃祭縣居翁之靈、号曰道祖神、精誠之至、遂大得発其繇奥、而後古言燦然可得言已、其為功也、於一傑有光矣、孔子云、後生可畏、猶信、是歲安政己未夏四月罹疾、二十九日歿于浪華之邸、年六十有五、葬城南珊瑚寺、銘曰

有才有學、世人所觀、神之助之、在乎好古

萬延紀元庚申冬十二月 門人 中川元端謹撰並書

これによって、明らかであるが、諸書は翁満を本居宣長門または鈴屋門系とするものがあることは誤りで、加茂真淵に私淑していたのである。中川元端は、大坂では名高い医家で、古西義麿氏『大坂医師番付集成 索引・解説』（昭和六十年四月二十一日刊）によると、安政五年仲夏から慶応四年夏までの医師番付の十種類のものに、東四段目から北三段目、東三段目あたりの格で所載されている。因に、黒澤翁満の和歌門人には医師が少なくない。

四、中西為子歌集

中西為子に、その歌集があったことは想像に難くないが、現在の中西一郎氏蔵品のなかに、為子歌集を見出すことはできない。

明治になってから、その歌集が上梓されたことは確實で、朝日新聞神戸支局編『夜明けの人びと―兵庫百年―』（昭和四十二年二月十九日刊）には、「十八年、為子歌集が出ている」とされているが、原本は未確認のようである。中西一郎氏記『中西家覚書』（昭和五十四年八月改訂、私家版、十七頁、系図一葉折込付）には、「明治十何年かかに、中西為子歌集が出版されており、兵庫の竹中いと刀目が持っている（加藤盛男氏談）」とされて、現在の中西一郎氏蔵に見当らぬことは、明らかである。小泉冬三編著『明治大正短歌大年表』（昭和十七年四月二十日刊）には、明治十八年の月不詳のなかに

中西為子歌集 二 南郷柳子

と記載されている。これによると、発行月日が『中西為子歌集』には不記で、二冊本であったこと、為子は明治三年没であるから、没後に南郷柳子が編んだものであることが判明する。南郷柳子は、為子の歌友とも、真の友ともいふべき女流歌人で、南郷三郎の母である。雑誌『女子之友』（明治三十年六月二十八日～三十六年八月二十二日）に、南郷柳子談・福富熊雄筆「中西為子伝」が所載されたことがある、というが、掲載号不明で検索したが、筆者は見出していない。南郷柳子は、旧姓を加納という（中西一郎記『参考』昭和四十五年四月改訂、十三頁、

私家版)。「中西為子歌集」は、おそらく、当時の歌集のほとんどがそうであったように配り本であったのであろう。竹中糸子が蔵していたというが、この人も中西為子らの歌友の一人で、落合重信著『神戸和歌史』(昭和十七年五月五日刊)の「八、野之口正武を中心とする歌会」の章で、慶応四年(明治元年)の正武歌会のメンバーに、竹中糸子・丹波元礼(種痘を神戸にもたらした蘭方医、勝海舟、西郷隆盛とも交流があった)・適堂(熊内村中西家にあった寺小屋の師匠)・富豪北風家の人々にまじり、為子の名前がみえているという。

よって、現在、『中西為子歌集』の存在を知ることを得ないために、中西一郎氏蔵の資料を中心として、諸書より為子の歌・長歌・雅文を集め、「中西為子歌集」の編を試みるものとする。為子には恋の歌はない。

凡例

- 一、現在知ることのできる限り管見に入ったものを集めた。が、さらに追補すべき資料の出現を待つものとする。
- 一、配列は、近世後期成立の和歌集の一般的部立と配列に準じた。
- 一、清濁については、濁音のものには濁音表記を施した。
- 一、採取した文献・資料については、次の略記号を設ける。
 - 中西一郎氏蔵品和歌短冊↓(中)
 - 荒尾親成氏蔵品和歌短冊↓(荒)
 - 管宗次蔵品和歌短冊↓(管)

web公開に際し、翻刻は省略しました

類題採風集 (嘉永六年刊) ↓ [採]
 類題採風集二編 (安政四年刊) ↓ [採二]
 落合重信「神戸和歌史」 ↓ [神]
 他のものは、それぞれ注記するものとする。
 一、配列した各々には、便宜上に、アラビア数字で頭に番号を打った。

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、
翻刻は省略しました

中西為子研究文献目録

富永寛編『松林飯山伝補遺』

(昭和三十一年二月十一日刊・青
泉社)

落合重信著『神戸和歌史』

(昭和十七年五月五日刊・上崎書店)

森統三著『森統三著作集』第六卷人物篇六

(昭和四十六年二月
十五日刊・中央公論
社)

神戸市立雲中小学校創立一〇〇周年記念誌編集委員会編集『創
立一〇〇周年記念誌』(昭和四十八年十一月十八日刊・神戸市)

立雲中小学校

中西一郎記『参考』(昭和四十五年四月改訂・私家版)

中西一郎記『中西家寛書』(昭和五十四年八月改訂・私家版)

荒尾親成稿「展示物(荒尾親成氏所蔵分) 解題」(年記不記・
一枚刷)

太田敏三著『葦合文化の源泉 布引瀧と周辺史蹟』(昭和二十

七年四月一

日刊・葦合

史蹟頒布の

会)

河野資基著「へちま文庫 金曜」(No.67)

太田敏三著『雲中教育と香字庵事蹟』(神戸市立雲中小学校)

森統三著『松本奎堂』(昭和五十二年五月十日刊・中央公論社

・中公文庫)

川島禾舟「香字庵中西為子」(『伝記』一〇巻十二号・昭和十

八年)

川島禾舟「近世播磨歌壇の一瞥」(『歴史と神戸』十七巻二十

二号・昭和五十三年三月一日

刊・神戸史学会)

加藤盛男「一絃琴と短冊」(『古筆と短冊』第八号・昭和三十

七年六月三十日刊・古筆と短冊研究

会)

荒尾親成「幕末神戸の関秀歌人中西為子」(『古筆と短冊』第

十五号・昭和三十

九年十二月三十日刊・

古筆と短冊研究会)

朝日新聞神戸支局編『夜明けの人びと―兵庫百年―』(昭和四

十二年二

月十九日

刊・中外

書房

須磨琴保存会編集『須磨琴』（昭和六十一年七月二十日刊・大

本山須磨寺）

《付記》本稿を成すにあたり、参議院議員中西一郎先生には、東中西家に伝わる中西為子の貴重な資料の閲覧に御理解・御高配賜わり篤く御礼申しあげるものである。中西良允氏・川崎一郎氏・田熊渭津子先生には御学恩賜わったことを明記して謝意を表する。